

氏名(本籍)	伊 ^い 関 ^{せき} 敏 ^{としゆき} 之 (山形県)
学位の種類	博士(情報科学)
学位記番号	情博第297号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科(博士課程) 人間社会情報科学専攻
学位論文題目	談話のイントネーション——Brazilの音調理論の英語教育への適用
論文審査委員	(主査) 東北大学教授 福地 肇 東北大学教授 生出 恭治 東北大学教授 関本 英太郎 東北大学教授 浅川 照夫(国際文化研究科) 東北大学助教授 菊地 朗

論文内容要旨

第1章 序論

本章では、本研究をしていく上での目的と意義について、考察している。本研究の目的(1.1.)としては、英語のイントネーションに備わっているさまざまな機能のうちの談話機能に焦点を当てて、Brazilの音調理論の有用性について考察することである。その際、最近の英語教育で重要視されているコミュニケーションとの関わりを考慮しながら、この理論がどのくらい有用であるのかに力点を置いて論じている。Brazil et al. (1980)では音調記述を二項対立の考え方に基礎を置いているが、この方式を採用することによって、従来説明できなかったこともいくつか明らかにすることができるということである。(島岡・前沢 1988)この点について、多くの用例を用いて立証することが、この論文において大きなウエイトを占めている。

本研究の意義(1.2.)としては、先行研究における代表的なイントネーション研究の有用性および問題点を紹介しつつ、Brazilの音調理論との比較を通じて、後者の方がはるかに有用であることを指摘することにある。さらに、コミュニケーション能力を重要視する最近の英語教育にとっては、その活用の仕方次第では、問題点もあるものの、音声教育のみならず、学校英語を含めた英語教育全体にとって極めて有意義なものとなることを示唆している。

第2章 英語におけるプロソディーおよびイントネーションの重要性とイントネーションの機能

本章では、まず英語におけるプロソディーとイントネーションの重要性について触れている。ここまでで全体としてのイントネーションの重要性が示されることになる。項目別に見ていくと、2.1. プロソディーとは何か、2.2. 音声学・音韻論におけるプロソディーの位置付け、2.3. 英語におけるプロソディーの重要性について、2.4. イントネーションとは何か、2.5. 英語教育におけるイントネーションの位置付け、2.6. 英語におけるイントネーションの重要性について、ということになる。特に、2.5. 英語教育におけるイントネーションの位置付けということを考えてみ

ることが、英語教師にとっては重要な出発点となる。2. 7から2. 12では、イントネーションのもつ5つの機能についての説明がなされている。項目としては、2. 7.イントネーションの機能概説、以下、2. 8.文法機能、2. 9.心的態度機能、2. 10.卓立機能、2. 11.談話機能、2. 12.スタイル機能である。イントネーションのもつさまざまな機能について述べることで、その多様性を記述するように努める。

第3章 談話のイントネーション理論と他の理論との接点

本章では談話のイントネーション理論と他の理論との接点について考察することが中心になる。項目別には、3. 1. Brazil 以外の音調理論、3. 2. Brazil の音調理論、3. 3. 今井 (1988, 1989) および川越(1999) との接点、3. 4.両者の比較・検討、である。3. 1.においては、Brazil 以外の音調理論として、Gussenhoven (1983) の核音調についてのアプローチの仕方について簡単に概観している。3. 2.では、Brazil の音調理論について、その基本的な考え方について詳しく論じる。ここは本章の中心であり、その構成は、3. 2. 1.理論の概要、3. 2. 2. Brazil の Tone についての考え方、3. 2. 3. Brazil の Key と Termination についての考え方、である。ここで特に重要なのは、3. 2. 2.であり、Brazil の Tone 分析とその評価が、この章の後の部分および第4章以降の議論に直接つながって行く。3. 3.の構成は、3. 3. 1.今井 (1988, 1989) および川越 (1999)によるイントネーションの理論の概要、3. 3. 2. Brazil の理論との接点、であり、3. 4.では、両者の比較・検討を行っている。

第4章 Brazil の音調理論と談話標識、つなぎ語、または文修飾の副詞などとの関係、および Tone の重要性についての相互作用的な説明

本章では、談話を構成する最も特徴的な表現に見られるイントネーションの現れ方に着目して Brazil の音調理論の妥当性を検証する。項目別に見ていくと、4. 1.では Brazil の音調理論と談話標識、つなぎ語との関係、4. 2. で Brazil の音調理論と文修飾の副詞などとの関係、4. 3. では Tone の重要性についての相互作用的な説明、をしている。ここでは、Brazil の音調理論を用いることによって、談話標識、つなぎ語、文修飾の副詞などに使われている音調がうまく説明できることが多いということがわかった。例えば、文修飾の副詞である *clearly, obviously, evidently, apparently* に見られるイントネーションの実現のしかたが無理なく説明できる。ここでは文の構造、意味、Brazil の音調理論の Tone に対する考え方（二項対立）などさまざまな領域にまたがっているので注意が必要であるうえに、語彙項目ごとに用法が異なったりすることがあるので、一概には言えないが、Brazil の音調理論が役に立つことが多いのである（*you know* や *you see* などの文副詞と同じ機能をもつ挿入節表現についても同様に説明できる）。4. 3.においては、Brazil の Tone に対する考え方をさらに発展させる議論を行っている。ここで扱うような項目は、日常会話をしている際においても、書かれたものを読む際においても、非常に重要な働きをするものである。

第5章 Brazil の音調理論を用いての音調分析

本章では、現在の英語教育で用いられている教材の中に見られるイントネーションに関わる諸問題を、Brazil の音調理論を用いて解決する方法を提案する。項目別に見ていくと、5. 1. NHK ラジオ英会話を用いての音調分析、5. 2. オーラル・コミュニケーションのテキストを用いての音調分析、5. 3. その他の英語教材を用いての音調分析、となる。

5. 1. では、基本的な英会話表現に関して音調分析を行うことによって、Brazil の音調理論の有用性を例証している。特に、I beg your pardon? / Oh, really? / And you're counting on me to finish it? / Watch your step! / Thank you. / This is a man's job, you know. / That sounds so meaningful. / It's why we're here tonight. / Remember your manners. などの表現において、Brazil の音調理論の有用性が十分に証明されている。そこで展開されている説明については、筆者独自の見解も随所に盛り込まれている。

例えば、I beg your pardon? という英会話での定番表現について見てみよう。従来から言われていることは、上昇調を用いると「おそれ入りますが、もう一度おっしゃってください」という意味になり、下降調を用いると「どうもすみません」とか「お許してください」という意味になるというものである。確かにそのこと自体は真実であり、そのように覚えておいても特に不都合なことではない。しかし、実際の教材に出て来ている I beg your pardon? が下降調で言われているのに、なぜ「何ですって」とか「もう一度おっしゃってください」という意味になるのか説明がつかないのである。ごく簡単にその理由を説明すれば、次のようになる。つまり、「何ですって」の意味が純粹に繰り返しを求める意味で使うのであれば、上昇調を用いるのが普通であろう。その場合には、「大体聞き取れましたが・・・」という含意を持って、遠慮がちな響きがあると思われる。それは下降上昇調と同様に、相手との共通の場を指向して上昇調が用いられるということの意味している。これに対して、全く知らないことを言明するように、相手との共通の場を指向せず一方的に発言する場合は、下降調を使用して「何ですって」という意味を表すことも可能である。つまり、「何ですって」ということを発話すれば（この訳語の後に、小西・南出編 2001, p.1598 では、相手の言葉をいふかって詳しい説明を求める言い方とある）、それは「何とおっしゃいましたか」という意味につながることになり、実質上は「もう一度言ってください」を意味することになるのである。

次に 5. 2. では、オーラル・コミュニケーションの検定教科書を用いて、音調分析を行っている。説明は主として、Do you know where the cafeteria is? という文に対してなされている。これも 2 通りの音調（上昇調と下降調）で読まれているが、どちらの音調で言われても間違いではない。ただし、話し手の意図によって、用いられる音調が異なることが考えられる。このような場合に、会話における話者—聞き手—情報の相互作用を考慮した Brazil のアプローチを採用すれば、2 度目に相手に聞く時にはなぜ下降調が選ばれたのかについて、明解に説明することができるのである。

次に 5. 3. では、その他の英会話教材を用いての音調分析として、あいづちの言い方を中心に、3 つの学習辞典に挙げられている用例について考察している。そこに出てくる英語表現は、Oh,

did you? / Oh, are you? / Did you? / Really? / Oh, didn't I tell you? / And you made money?のようなものである。これらはすべて 5. 1. および 5. 2. で出てくる英会話表現と同様に、Brazil の音調理論で説明が可能なものである。

第 6 章 結語

第 3 章から第 5 章にかけて、Brazil の音調理論の概要について説明をし、さまざまな具体例に基づいて音調分析をして、その有用性を明らかにしてきた。ここでは、そのような過程を通して判明した、Brazil 理論の優れた点と問題点について述べることに、今後の課題について述べることに中心になっている。

6. 1. では、Brazil の音調理論の英語教育への適用の意義と評価を述べている。6. 1. 1. Brazil の音調理論の優れた点、6. 1. 2. は、Brazil の音調理論に関する問題点に触れる。Brazil の音調理論の優れた点としては、次の 3 つのことが挙げられている。1、話者—聞き手—情報の見地から明解な説明が可能であること（従来、常識とされていた考え方に対して、それが間違っているかあるいは不正確であるということをはっきりと示すことができること）。2、態度的アプローチ（心的態度機能を重視する立場と同義）のまぎらわしい用語の大半を破棄し、さらに、革新的な教育に対してより体系的な枠組を提供してくれること。3、音調が文の構造によって決まらない際の実用的な武器になること。次に、Brazil の音調理論に関する問題点として、2 つのことに言及している。1、Tone の設定の仕方について。2、渡辺（1994a, p.240）の問題提起について。この 2 つの問題点に関して、まだ完全な答えが出ていないわけではないが、今後は Brazil 理論と今井・川越理論の両方の考え方を基礎にして、さらに問題解決に向けて努力していくことが肝要である。

最後に、6. 2. では、今後の課題として、次の 5 つのことを指摘した。1、Key と Termination の system の扱い方について。2、Brazil et al. (1980, pp.132-133)におけるイントネーション・シラバスについて。3、House (1990, p.56)における Notes について。4、いくつかの実用的な理論との共通性を模索すること。5、日常会話以外の場面においても適用すること。

論文審査の結果の要旨

自然言語の構造と機能を分析するうえで、音調は、含意や発話意図とともに、文を構成する言語レベルの中では明示的な記述と説明が最も困難な領域である。一方、言語教育の現場では、実際的な言語コミュニケーション能力を獲得するうえで効果的な習得が最も求められる領域でもある。本論文は、言語教育の視点から、音調に関する従来諸知見を踏まえ、Brazil (1980)の音調理論に依拠する談話音調モデルを提案し、広範な語学学習教材を基にその妥当性を検証するとともに、更に有用性の高い音調理論の構築を目指したもので、全編6章から成る。

第1章は序論であり、本研究の目的と意義について述べている。

第2章では、自然言語のプロソディ現象の中で音調が果たす役割を、コミュニケーション・アプローチに主眼を置く近年の言語教授法の観点から整理するとともに、言語教育の場において音調が果たす5つの主要な機能について、言語学上の基盤と関連させて、詳細に論じている。

第3章では、文レベルと談話レベルに関する従来提案された音調理論の比較を行い、言語教育上有用な談話レベルの音調概念として、Brazilの理論で用いられる tone, key, terminationの概念を検討するとともに、4章以下の分析作業に向けて、これらの概念を精密化している。

第4章では、談話音調理論を用いることによって、実際の発話において頻出する、談話・テキスト性の特徴となる言語表現を分析している。特に、談話標識的表現、文の間の接続機能をもつ表現、文副詞およびそれと同じ機能をもつ挿入節表現が、複雑多様な音調を伴って現れる現象に関して、談話音調理論に基づく説明を試みて成功している。これは貴重な成果である。

第5章では、ラジオ・テレビ等の語学講座教材、オーラル・コミュニケーション科目の検定教科書、その他市販の語学教育教材に頻出する談話上の基本表現を資料として、談話音調理論の妥当性を検証している。特に、統語上の形式と発話行為上の話者の意図の間に規則的な対応関係の見られない言語表現が帯びる多様な音調型の多くを、談話音調理論によってほぼ正しく予測している。これは、言語教授法研究のみならず音韻論・韻律論にも貢献する成果である。

第6章は結論として、Brazilに依拠する談話音調理論を言語教育に適用する意義を論じ、その実践例の評価をするとともに、今後に残された問題点の指摘をして、将来を展望している。

以上、要するに、本論文は、談話構造に関わる音調理論の有用性を言語教育の観点から確かめて発展させる試みであり、言語学および情報科学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。